

第20回
【特別対談企画】

強い弟子の育成が部屋の経営に直結。 競争原理が支える大相撲の世界。

大相撲キャスター 銅谷 志朗 氏

臨場感や感動を 伝える仕事

スポーツの実況放送のアナウンサーは、ゲームや試合の局面が変わるところで瞬時、瞬時に言葉を選ぶ判断を求められるので大変ですね。先天的な能力も必要なのではないでしょうか。

中継を担当する機会も多々あり、時には絶叫することもありましたからね(笑)。



直に接して、名アナウンサーと呼ばれた方は、「声」の魅力もすごいなと実感させられます。ところで、大相撲五月場所が先般、終わりました。本命の横綱白鵬ではなく、関脇照ノ富士が十二勝三敗で初優勝を果たしました。銅谷さんから場所を振り返っての簡単な総括のコメントをいただけますでしょうか。

そうですね。白鵬は大きな怪我也なく、破られないと長く思われていた大鵬の三十二回優勝の記録も超えて、三十四回まで優勝回数を重ねています。

白鵬は右四つになって、左の上手を引いて寄っていく、あるいは前へ出てから投げる、これが一番強い時の相撲なのですが、五月場所はちょっと相手をごまかすような感じの取り口が少なくなかった。安美錦戦に限らず、危ない場面がたくさんありました。

今回優勝すると、区切りとなる三十五回目だったのですが、三十二回という大きな目標を既にクリアしていたものから、場所中、勝負に向けた心を整えるのに結構時間がかかっていたのではないのでしょうか。体力的にはまだ問題は感じられませんか。でも、相撲の内

勝ちはしましたが、安美錦に背後にまわられた五日目の相撲は、まさにヒヤヒヤものでした。よくぞあれで勝てたなど。

白鵬は右四つになって、左の上手を引いて寄っていく、あるいは前へ出てから投げる、これが一番強い時の相撲なのですが、五月場所はちょっと相手をごまかすような感じの取り口が少なくなかった。安美錦戦に限らず、危ない場面がたくさんありました。

従来は、柔軟な下半身に頼るようなところが見られたのですが、三月場所あたりから積極的の前に出る相撲が変わってきた。右でも左でもまわしを引けば、安定感がある。すぐ横綱を目指せる大関になるのではないかと期待しています。

照ノ富士躍進は 部屋移籍が契機

偉大な記録ですね。

一方、優勝した照ノ富士は、度胸がすごいですし、伸び盛りの力士は一晩寝ると強くなるというように、急激に強くなっていますね。彼はもともと問垣部屋に所属していたのですが、二〇一三年に問垣部屋が閉鎖されて伊勢ヶ濱部屋に移って

部屋の規模が 稽古の質を左右

ちよつと話がかわるのですが、大相撲には武道、神事、興行と、包含しています。大相撲の本質は、どれに当てはまるでしょう。

角界の中では、「相撲道」という言葉をよく使います。相撲は柔道、剣道、茶道、華道などと同じように長い歴史を有しております。私にも講演などで「相撲道から何を学ぶか」というテーマで話をしますが、非常に奥が深いです。

「道」なら、日本古来の武道や茶道、伝統芸能で受け継がれている「守・破・離」があるわけですね。「守」は自分が信じている(師匠)をまず見習って、その技術の域まで達しましょう。「破」は、その域を超えましょう。そして、「離」は自分の形を作りましょうという意味です。

大相撲でもそうした点は、まったく同じです。稽古をつけてくれたり、世話になった先輩に勝つことを「恩返し」と言います。島さんが今おっしゃられたプロセスを経ないことには、「恩返し」はできません。また、「稽古」という言い方も他の「道」と共通しています。高校や大学のアマチュア相撲では「練習」という呼び方が一般的です。

苦勞の経験が 指導者の礎に

野球のキャッチボールのように、相撲の基礎中の基礎となる鍛錬は何になるのでしょうか。

四股、てつぼう、摺り足ですね。そして、ぶつかり稽古。ぶつかり稽古は相当に苦しくて、今の力士はあまりやりたがらないんです。それよりも、個別のウエイトトレーニングに精を出す力士が増えていきます。でも、ウエイトトレーニングだけでは筋肉が固くなって、いいことがないとおるベテランの親方は言っていました。

小さい部屋では、ぶつかり稽古をしあえる力士の絶対数が足らず、加えて無理矢理にでもぶつかり稽古を先導するような先輩力士もいません。親方もひと昔前のように竹刀を片手に厳しい指導をするということができなくなっています。ですから、部屋の大小などの環境面でも稽古の質が左右される傾向が出ています。

先ほど、照ノ富士の優勝は伊勢ヶ濱部屋への移籍が奏功した結果とお話でしたが、入門する部屋によって、若い力士が伸びる、伸びないということが現実問題としてありそうですね。

お金の仕組みはどうなんですか。

強い力士が育てば、その会社、つまり部屋は利益を生み出せます。特に横綱が部屋にできる。と利益の額が違ってきます。横綱はいろんな意味で米びつとも呼ばれ、昔は横綱を一人育てるとビルが建つとも言われました。

自分の記憶の中では、前の二子山部屋とか、もう閉鎖された三保ヶ関部屋などがそうでした。

優秀な社員、すなわち優秀な力士の少ない部屋は、言ってみれば儲からない仕組みです。そういう厳しい競争原理の働くシステムになっているため、部屋の浮沈は親方の指導力が強く左右します。

大きな部屋イコール優秀な指導者がいる部屋ということでしょうか。

いや、必ずしもそうではありません。弟子の分家・独立を許さない方針を取っていたりある大きな部屋では、師匠である部屋持ちの親方のほかに、部屋付きの親方がたくさんいました。

コーチ役ですね。

そのコーチがたくさんいる部屋は、いわば船頭が多いわけですから、寄つてたかつて重箱の隅をつつくような指導をバラバラに力士にしていました。そのため、逆に力士が伸びなかつたように思います。

それから、世間で「天才」と言われた優秀な横綱が、弟子の育



の下には現在、四十三の相撲部屋があります。で、協会を親会社、各部屋を傘下の子会社と考えてください。四十三部屋の親方は皆、子会社の社長です。教育方針や指導方法、そして経営に至るまで、各部屋の親方の自主性に任ざれており、しかも各部屋は独立採算制です。よっぽどのことがない限り、協会は各部屋には口出しできません。これが昔からの伝統です。そして、各四十三の子会社は一生懸命競争しているわけです。

お金の仕組みはどうなんですか。

強い力士が育てば、その会社、つまり部屋は利益を生み出せます。特に横綱が部屋にできる。と利益の額が違ってきます。横綱はいろんな意味で米びつとも呼ばれ、昔は横綱を一人育てるとビルが建つとも言われました。

自分の記憶の中では、前の二子山部屋とか、もう閉鎖された三保ヶ関部屋などがそうでした。

優秀な社員、すなわち優秀な力士の少ない部屋は、言ってみれば儲からない仕組みです。そういう厳しい競争原理の働くシステムになっているため、部屋の浮沈は親方の指導力が強く左右します。

大きな部屋イコール優秀な指導者がいる部屋ということでしょうか。

いや、必ずしもそうではありません。弟子の分家・独立を許さない方針を取っていたりある大きな部屋では、師匠である部屋持ちの親方のほかに、部屋付きの親方がたくさんいました。

コーチ役ですね。

そのコーチがたくさんいる部屋は、いわば船頭が多いわけですから、寄つてたかつて重箱の隅をつつくような指導をバラバラに力士にしていました。そのため、逆に力士が伸びなかつたように思います。

それから、世間で「天才」と言われた優秀な横綱が、弟子の育



島経営グループ 会長

島 善昭



大相撲キャスター

銅谷 志朗 氏

【Profile】 銅谷 志朗氏 大相撲キャスター

どうや・しろう。1944年東京都生まれ。明治大学政経学部卒業後、山陽放送にアナウンサーとして入社。その後、テレビ朝日に移籍。ニュース、ナレーション、大相撲を中心とするスポーツ実況などで活躍。テレビ朝日系の人気番組「大相撲ダイジェスト」のキャスターを20年間担当した後、91年にアナウンス部副部長からフリーに。各局のスポーツ番組のキャスターやワイドショー、ニュース番組の相撲コメンテーターなどを務め、現在は日本相撲協会内の館内FM放送「どすこいFM」のキャスター。著書は、『大相撲の魅力-相撲アナが語りつくす』（心交社）、『満員御礼！-大相撲なんでも早わかり』（講談社）など多数。

成で成功しているかという点、実はそうでもない。

野球と一緒にですね。名選手、名監督にあらず。

例外はあるのですが、体が大きくないなどの理由で苦勞して横綱になった親方は、指導がうまいなと感じます。何故かというと、試行錯誤を繰り返した豊富な経験から、ここをこういう風に直したら、あるいはそこをこういう風に伸ばしたら強くなるよ、といったことを具体的に教えられるのです。

さらに、横綱に手が届かなかった苦勞派の元大関の親方も、自分の夢だった横綱を育てたいという強い意気込みも手伝って、指導というものをよく勉強し、教えるのがうまいですね。

苦勞した経営者はよく伸びると言いますが、それと似ていますね。

経営やビジネスの世界とまったく同じだと思いますよ。

弟子一人あたり 二百万円の支給

すると、企業経営者が大相撲の世界で参考にできるところもありそうですね。

そうですね。いろんな点で競争原理が働いているところでしょうか。日本相撲協会では、実務を含めた運営の大半を元力士の親方衆が担う一方、それぞれが保有したり部屋付きとなっている各相撲部屋の運営にはある程度の自主性と権限、責任が与えられ、部屋同士が競争関係になっていて、部屋レベルでもさうなところだとも思います。さらには、部屋レベルでも力士間の競争があり、場所に入れば十五日間にわたる真剣勝負の競争が続きます。

勝てば儲かる、勝てば番付が上がるという、非常に分かりやすい競争ですね。

土俵の下には宝物が埋まっているという格言もあるように、強くなればお金が入るシンプルな仕組みです。すると、力士は切磋琢磨して横綱や大関を目指すようになる。最高位の横綱になれば後援者もつきますし、テレビのコマーシャルにも出られる。お金が自然と入ってくるようになっていくわけですね。

だから、一生懸命やると。各部屋には、弟子の育成費など複数の名目で幕下以下の力士一人あたり年間およそ二百万円が相撲協会から支払われています。師匠は協会からもらう給与のほかに、力士が二十人いれば年間四千万円相当の収入が得られる仕組みです。で、弟子がこの二十人いれば採算ベースに合うと言われています。

食べ物にかかる出費は大きいでしょう。

食費だけでなく、光熱費や弟子の医療費まで全部親方が負担しています。ただ、相撲の世界にはタニマチ、後援者がいて、肉、魚、米など食べ物に関しては現物を大量に差し入れてもらっているの、傍から思うほどのお金はかからないようになっていきます。それよりも出費として大きいのは借金の返済です。

返済ということは、銀行からの借り入れですね。そうですね。部屋持ちの親方になるには年寄株を取得する必要があるのですが、その費用は一時期三億円を超えることもありました。さらに、部屋を新築しようとすると一億円はか

かります。銀行から借り入れをして、晴れて部屋持ちの親方になったら、その返済が待ち受けているわけですね。

多くの、しかも強い力士を育てて、収益を伸ばすようにしないと、大変ですね。育成は死活問題です。

競争原理が働く中で、部屋の衰退もあれば、伸びるところもある。その上に日本相撲協会があり、安定を保っています。そういう面白さが大相撲にはあるわけですね。

輝に寄せられる 期待は大

最後に、石川県出身力士について、銅谷さんの見解を聞かせてください。まず、高木（金沢市出身）はどうでしょう。体重が二百キロくらいある巨漢で、五月場所は幕下で全勝しました。七月場所ではいよいよ十両です。

彼は拓殖大学出身の学士力士ですよ。これから十両を迎えるわけで、正直なところまだ海のものとも山のものとも分りません。体は確かに大きく、強いには強いのですが、ちよつと太り過ぎかな。将来性は感じられますので、今後に期待というところですね。

次に、輝（七尾市出身）はいかがでしょう。五月場所は西十両四枚目で、八勝七敗の成績でした。彼は我々相撲記者の間でも、今後を強く期待されている力士の一人です。まず長身で腕も脚も長く懐が深い。長い腕を繰り出す突っ張りや威力があり、さらには、突っ張ってから四つ身になっても相撲が取れます。腕が長いとまわしに手が届きやすいメリットがあるんです。所属している部屋もいいですね。

元関脇安芸ノ島の高田川部屋です。稽古量が豊富な部屋として知られています。立ち会いに幕内上位に通用する力がまだありませんので、その点もつと力をつけたいといけません。

精進の余地があるということですね。輝は地元紙のインタビューで高田川部屋を選んだ理由に、稽古量が角界でもトップクラスということも挙げていて、好感度は高いです。

そして、遠藤（穴水町出身）ですね。まず、彼の角界への貢献度から言及すると、まず顔がいい（笑）。

男前ですね（笑）。

そして、白鵬と同じで体がきれいな女性ファンがわつと騒ぐ要素を備えていて、負けても拍手をもらえるだけの「華」があります。

寺尾なんかがそうでしたね。

相撲界では彼のような力士の登場が長い間熱望されてきました。プラス強ければ、もう大フィーバーですよ。

遠藤は膝の靭帯の怪我が完治していないにもかかわらず、五月場所に出場し、十五日間で六勝もしました。途中から取り組みの内容も良くなってきましたね。前に出る分には膝に負担がかからないので、受け身ではない攻めの姿勢が見えるようになりました。怪我が回復したらどんどん稽古を積んでほしい。彼は体が柔らかいし、左四つ型の型を持っています。あくまで稽古量次第ですが、将来的には大関までは狙えるかなと期待しています。

銅谷さんのお話を聞くと、郷土出身三力士からますます目が離せなくなりそうです。本日はお忙しい中、対談にご協力いただき、ありがとうございます。